

## 資料室だより 139

当館が継続購入している雑誌が2誌、ほぼ同時に納入され、そのどちらにもかつてグレゴリオの家の本科生として学び、その後グレゴリオでも講師を勤められたお二人の方の記事が寄稿されておりましたのでご紹介します。

\* 「礼拝と音楽」194 日本基督教団出版局 所収

### 西脇純：古の響き、代々の祈り (2) 主の祈り

主の祈りの歴史的継承、典礼における位置、旋律についてなど私達が基本的に抑えておくべき事柄をわかりやすくきちんと説明してくださっています。ご一読をお勧めします。

同じ194号のなかには「われわれは何者か—歌えない時代を超えて」という座談会があり、登壇者の一人が本科卒業生の鈴木敦子さんです。

\* 「礼拝音楽研究」20-21 キリスト教礼拝音楽学会 所収

### 安積道也：歌なき会衆賛美がもたらしたもの —現場からみたコロナ禍における礼拝音楽の推移と現状—

安積さんはドイツのハイデルベルク教会音楽大学で教鞭をとっておられ、ドイツでのロックダウンを経験されています。日本はロックダウンこそなかったものの教会はほぼドイツと同じロックダウン状態であり、彼の述べる「賛美の本質である共時性と身体性」を奪われ、「会衆が聴衆化する」という現状は同じです。「共に歌う」ということと命を天秤にかけなければならない現場での示唆に富んだ寄稿、こちらもお勧めします。

キリスト教は歌う宗教であり典礼文化は本質的に三密を前提としているので、コロナによってまさに息の根を止められたわけですが、この試練を通して教会音楽が成長しないはずはないと私は個人的に信じています。

杉本ゆり 記